ガマ科 ガマ属

ガマ（蒲）

Typha latifolia L.

自生環境

湿地、水辺 など

原 産 地

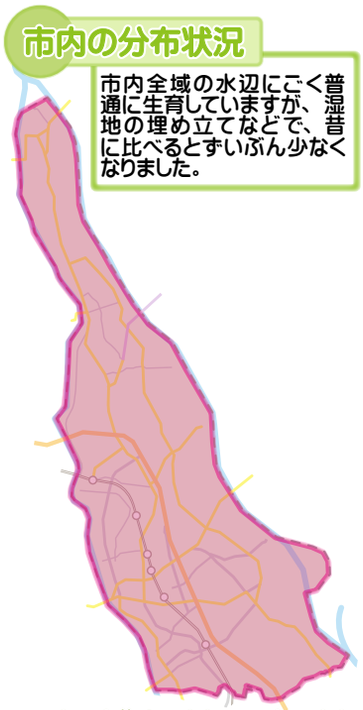
日本在来

生育を脅かす要因

水辺に多く、今のところ絶滅の心配はありません。しかし、ガマの生える場所は埋め立てや河川改修など、人間活動の影響を受けやすい傾向があるため、油断はできません。

市内の分布状況

市内全域の水辺にごく普通に生育していますが、湿地の埋め立てなどで、昔に比べるとずいぶん少なくなりました。



特　徴

- 湿地や沼のへりなど、 比較的水深の浅い場所に生える多年草です。 太い地下茎をどんどん横に伸ばし、 しばしばあたり一面の群生となります。
- 早ければ 5 ～ 6 月頃から花の穂がつきはじめます。 はじめ苞と呼ばれるものにくるまれていますが、 開花とともに苞は自然に脱落します。 花の穂は上下に分かれ、 上が雄花の穂、 下が雌花の穂になっています。 雄花の穂は開花とともに大量の黄色い花粉をまき散らします。
- 雌花の穂は受粉すると、 成熟しながら次第にこげ茶色になり、ソーセージのような独特の姿となります。 この穂は晩秋～初冬にかけて弾け、 綿毛つきのタネを大量に飛ばします。

白うさぎを救った草

ガマの花粉は蒲黄（ほおう）と言い、止血剤になります。その薬効は、かなり古くから知られていて、日本最古の歴史文学書『古事記』内の「因幡（いなば）の白兎」という神話にも出てきます。そこに登場する白うさぎは、毛を全部はがされて赤裸の状態で泣いていました。通りかかった大国主命という神様に教えられ、ガマの花を摘んで寝転ぶと、毛が生えて元通りになったとのことです。

わぴちゃんねる　千葉県野田市の植物を動画で紹介！

https://www.youtube.com/channel/UCJvrXBJegnWATWd-UZsNzCA